

終章

森や自然に夢中になれたか？

東京大学大学院農学生命科学研究科教授 青木 謙治

「幸せな人生とは何だろうか？」

序章において、編者の田中伸彦氏より投げかけられた問いである。本特集を読んで頂いて、その答え、あるいはヒントが見つかったであろうか？

今回の特集では、『森や自然に夢中になれる社会をつくるためには？』と題して、10人の方に様々な視点からご寄稿頂いた。第一部では、「森や自然に夢中になるとはどういうことか？」と題して、①人が物事に夢中になる基礎理論や、②山と人との関わりに関する歴史的論考、③感性という人の内面と森林とをつなぐ研究紹介といった内容で、少々難解な表現も含まれてはいたものの、学問的な視点から人が森や自然に夢中になる仕組みについて解説頂いた。第二部では、「夢中で森や自然と関わる理由」と題して、④沖縄における希少生物の写真撮影に人生をかける姿や、⑤森林の中で行われるアウトドアスポーツの実践、⑥森の産物である木材を使った家具作りの魅力、⑦森林の生態を突き詰める研究者としての生きざま、といった感じで、森や自然を活用した仕事に就かれている方々の生の声をお届けした。そして第三部では、「森や自然に夢中になる仕組みを支える」と題して、⑧奥入瀬溪流でのネイチャーガイドを通した自然との関わりの魅力発信、⑨博物館の学芸員としての森や自然の楽しさの発信、⑩図鑑の編集を通した植物世界の奥深さの発信、といったように、人々が森や自然に夢中になるためのサポートをしている方々がその取り組みを紹介している。

筆者自身は、現在の仕事として木材利用や木造建築を扱う研究分野にいても、⑥の家具作りが最も近いフィールドであり、自分自身でも木工作業（DIY）で自宅の棚を作ったり、研究室の内装を木質化したりと、木材

を触り、香りを嗅ぎ、木目や色を直接見ることに喜びを感じながら生活をしている。いつからこういうことに喜びを感じるようになったのかは定かではないが、子供のころから夏の家族旅行は海ではなく山に行き、1週間ほど古びたコテージで自炊をしながら、森の中を散策し、時には北アルプスの山に登り、川のせせらぎを聞きながら眠りにつくような生活をしてきた。枯れ枝を集めて火をおこし、ナイフで枝を削って工作をしてという今の仕事に通じる遊びもそこで覚えた記憶がある。

上記でいうところの③の森林セラピーを毎年享受していたわけだし、森の中で⑤に通じるアウトドア体験もしていたし、④につながる都会にはいない昆虫や植物を毎年見ていたわけである。こういった原体験は、もともと登山が趣味だった父親の意向によるものではあったが、筆者自身のその後の趣味嗜好や大学での進路にも強く影響を及ぼしていることはおそらく確かであろう。そういった意味で、本特集の⑧、⑨、⑩といった森や自然の魅力を発信する人や物がいかに大切かということもよく理解できるのである。

人と森あるいは自然との関わりはそれぞれであろうし、幼少期の原体験がなかったとしても、ある時突然何かに目覚めて夢中になっていくということもあるだろう。その対象が樹木なのか、昆虫や鳥なのか、あるいはレジャーなのかスポーツなのかかわからないが、何かのきっかけがあるはずである。そのきっかけを与えるのが図鑑や博物館といった専門的知識を学べる場なのか、あるいはテレビなどのメディアなのか、あるいは人から誘われて嫌々ついて行っただけなのか、理由も様々であろう。しかしながら、理由はどうあれ、森や自然に夢中になっていくのは、人間としてのDNAに刻まれた微かな記憶を呼び起こしていることなのではないだろうか？

人類は太古より森林と共に生活してきた。森林は野生動物から身を守る役割を果たしてくれたし、木の実や果実は人類の命を育む食料となった。枝を削って様々な道具を作り、落葉を集めて火をおこし、丸太を組んで住居も作った。まさに人類は森と共に生活をし、進化してきたのである。その古の記憶は我々人類のDNAに刻まれているはずであり、それゆえに森に行くと気持ち落ち着くとか、木に囲まれた生活をする方が心が安らぐといった生理応答に現れるのではないだろうか。近年、室内に木をふんだんに使ったオフィスビルが増えたり、建物そのものを木造で建てたりする事例も増えているが、

これも上記の木を使った空間にいると人間は心地よく感じるといった研究成果を活かしたものである。「都市の森林」という言い方があるくらい、都市部でも木をたくさん使い、木に囲まれた空間をつくろうという施策も大々的に推進されている。こういったことも、人が森にいると心地よいと感じるからこそその施策といえるだろう。このように、森や自然と触れ合うことは、おそらくほぼ全ての人にとって健康で快適な生き方に通じる要素を含んだものであるはずで、それを自ら求めて行動に移すのかどうかで『幸せな人生』の度合いも変わってくるように思う。

本特集『森や自然に夢中になれる社会をつくるためには？』の答えは一つではない。一人一人が幸せだと感じるものに夢中で取り組める社会、そういったものが実現できるよう、少しずつ前に進んでいきたいものである。